杲宝の禅宗観

——『開心抄』上卷をめぐる——

本稿では、十四世紀に活躍した古義派真言宗の学匠で、東寺学派の大成者でもある、東寺観智院を開いた杲宝（一三〇六—一三六二）の著述である『開心抄』上巻の内容を検討しつつ鎌倉新仏教としての禅宗を杲宝がどのように捉えていたのかを考察するものである。

まず、弘法大師空海（七七四—八三五）がまとめた「十住心思想」では当然、禅宗は密教に収められるのに、何故、十四世紀になって、突然、禅宗だけを取り上げて論じる必要があったのかということが問題となるのである。それを、杲宝が活躍していた十四世紀半ばの日本仏教の動勢から考えるならば、杲宝にとって、新しい仏教勢力としての禅宗、特に、「教禅融合」の立場から「密禅併修、禅密一致」を平然として説く、日本臨済宗の一派の存在ということが考えられるのである。その臨済宗の一派としては、栄西の系統、円爾の系統（聖一派）、覚心の系統（法燈派）が考えられる。さらに、

五山・十刹制度の確立期にも当たっていることも関わりがあると思われる。そこで、同じく京都・東寺で活躍していた杲宝にとっては、当然、禅宗に対して無反応ではいられなくなつたものと考えられる。以上が、本稿の問題の所在である。

次に、杲宝と禅宗との関係が如何に深いものであったのかということでは、後世のものであるが、『杲宝僧都事実』という伝記に、「南山宥快は空海の皮を得たり。頼瑜は空海の肉を得たり。杲宝は空海の骨を得たり（一）云云」と記されている。これは、正しく、禅宗の「皮肉骨髓」の話に準えているのである。これだけでも、後世の人から杲宝と禅宗との関わり方が推察できるものと言えよう。

続いて、『開心抄』の構成について簡単に触れてみたい。本稿では、『大正新脩大藏経』第七七巻所収の『開心抄』を用いるものである。『開心抄』は上・中・下巻の計三巻から成る。そして、本稿ではその中、禅宗について論じられてい

千 葉 正

る上巻の構成についてのみに限って記してみたい。この『開心抄』上巻については、杲宝自筆本（観智院所蔵）と慶長本活本（大谷大学所蔵）の二本が、『大正新脩大藏経』第七七巻に収められている。まず、『開心抄』上巻がいつ書かれたかは、奥書に「貞和五年九月二十一日」（一三五〇年）とある。

そこで、杲宝自筆本は、「禅宗属頭門、達磨私建門、機教前後門、過失揀択門、末世相應門、護国済生門、証道唯密門、本分極不門、心体同異門、秘密修禅門」の計十章から成る。

また、慶長本活本は同じく十章から成るが、それは、「禅密撰属門、機密前後門、達磨私建門、癡著徳失門、本分極不門、末世相應門、護国済生門、証道唯密門、心体同異門、秘密修禅門」という構成となっている。この十章によって、問答体の形式で杲宝は禅宗に対する批評を行なっているのである。そこで、本稿では、この十章の中、杲宝が最も力を入れて禅宗を論じている、「禅宗属頭門」と「達磨私建門」の二章を中心に、その内容を考察することにする。

さて、この二章の内容から杲宝の禅宗観の特長を次の三点にまとめてから検討に移りたいと思う。第一点は「禅宗を頭教と判ずる」、第二点は「教外別伝思想への批判」、そして、第三点は「祖統説への批判」という以上の三点である。それでは、この三点の立場から具体的な検討に入る。

まず、第一点の「禅宗を頭教と判ずる」という立場から

ある。ここでは、『開心抄』上巻の第一章に掲げられている「禅宗属頭門」の冒頭で次の様に尋ねる。

問。真言宗立頭密二教撰一切仏法云云且以達磨所伝禅法可撰属何二耶。（大正蔵七七・七三六a）

この問いは、真言密教の立場から当然、尋ねられる可きものと云えるであろう。この問いに対して、杲宝は次の様に答える。

答。高祖大師。然禅法是釈迦応仏説故。為三頭所属。此略有三意。一約二依経。二約二相承。三約二宗要。（大正蔵七七・七三六a）

ここでは、杲宝の独自の見解といえる「三意」の立場から禅宗を頭教に位置づけようとしていることが分る。そこで、「依経」の立場からは、延寿の『宗鏡録』や宗密の『禅源諸詮集都序』を引用して、六祖慧能が『金剛経』で得法したことを述べて空海の『弁頭密二教論』から、「頭教契経部有二百億⁽³⁾」を引用して、禅宗は經典に依るから頭教であると判ずるのである。そして、「祖承」の立場からは、密教は法身大日如来から相承であるのに対して、禅宗は、「然禅家亦以釈尊⁽²⁾為説主。以⁽¹⁾迦葉⁽²⁾為⁽³⁾初祖。」（大正蔵七七・七三六b）と説いて頭教に判じているのである。次に、「宗要」の立場からは、やはり、空海の『請来目錄』⁽⁴⁾からの引用によって、「禅門修行已就⁽¹⁾一心利刀。未⁽²⁾知⁽³⁾三密秘蔵⁽⁴⁾属⁽⁵⁾頭験。」（大正蔵七

七・七三六c)と述べて、禅宗を顕教に判じている。以上、「禅宗を顕教と判ずる」という点から、杲宝の禅宗観の第一の特長を言えば、禅宗側の「禅密一致説」への批判ということになるものと言えよう。

さて、次に、「教外別伝思想への批判」という立場を示すものとして、同じく「禅宗属顕門」の章の中から、一つ取り上げるならば、それは、次の様に説かれている。

禅宗為利智者直示二本分不假言詮故云教外可別伝不立文字也。然密教意無教外可詮顯二元法。無離言可入二元処。廢能詮所詮声字即実相。(大正蔵七七・七三七b)

ここでは、特に、傍線部分が「教外別伝思想への批判」と言え、中でも「声字即実相」ということが、正しく、真言密教の立場であると言える。

次に、「達磨私建門」の章についての検討に移りたいと思う。ここでは、杲宝の禅宗観の特長の第三点として、「祖統説への批判」が長大に説かれているが、本稿では、その一部を取り上げてみることにする。それは、次の様に尋ねられる。

問。或禅者以諸教総為私建之別宗。褒禅宗二独三公伝。其詞云。唯我禅門、娑伽直下受授嫡聯。故為二代公伝。宗門之号不亦宜乎云云此有謂歟如何(大正蔵七七・七三七b)

これは、何か問い質すが如くの厳しい口調の問いである。こ

こでの「或禅者」とは、虎関師錬であり、彼の『宗門十勝論』⁽⁵⁾という書からの説を引用して批判を始めている。この「達磨私建門」では、『宝林伝』以来の、禅宗の西天二十八祖説を批判して、禅宗は達磨が個人的に建てた宗派であると評価しているのである。そして、杲宝は、中国天台・山外派系の『止訛』(『仏祖統紀』巻二十一所収)⁽⁶⁾の説を引用して、契嵩の『法正宗論』の二十八祖説を厳しく批判する。そして、この「達磨私建門」の末尾に、「開元貞元蔵録載」之流行。天台嘉祥高祖引之証誠。然嵩為繼已祖恣貶三蔵伝謂論書。愚拙之甚也。⁽⁷⁾と激しく批判しているのである。つまり、血脈を重んずる真言密教側からの祖統説批判と言えよう。

最後に、本稿をまとめるならば、禅宗を飽くまでも顕教と判じ、西天二十八祖説の不当性を論ずるのが、杲宝の禅宗観の特色と言えるのである。

- 1 『統群書類聚』第九輯上二二二頁上
- 2 大正蔵七七・七四三a
- 3 大正蔵七七・三七四c
- 4 原文に、大正蔵五五 一〇六五頁cに「修定多途。有遲有速者。翫二心利刀是顯也」とある
- 5 『五山文学全集』上巻『濟北集』巻十四 一一七〇頁
- 6 大正蔵四九 二四二a
- 7 大正蔵七七 七三九a

〈キートワード〉開心抄、顕教、西天二十八祖

(駒沢大学大学院)